



Title	日英博覧会における美術品としての陶磁出品と京焼
Author(s)	盧, ユニア
Citation	デザイン理論. 2021, 78, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83333
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日英博覧会における美術品としての陶磁出品と京焼

盧 ユニア ソウル大学 日本研究所

はじめに

日英博覧会は、1910 年 5 月から 10 月までロンドンで、日英「両国間ノ国交ヲ更ニ一層親善ナラシムルト同時ニ其ノ通常貿易ヲ助長スル」ために開催された国際博覧会である。

日英博覧会における陶磁出品の特徴としては、古美術品と新美術品として区分された美術品において、古美術品の陶磁出品がなかったことが挙げられる。

さらに新美術品の陶磁出品において、京焼の比重が高かったことが注目される。特にその作品群から、中澤岩太と浅井忠らが京都で取り組んでいた図案改革の影響が窺える。

以上のことを踏まえて本発表では、過去の万国博覧会と比較しながら日英博覧会における美術品としての陶磁出品の特徴を考察する。さらに出品までの経緯と作品と作家を分析し、この時期に見出せる京焼の革新と中澤岩太や浅井忠らの図案改革とのつながりを明らかにしたい。

1. 出品の概要及び陶磁出品の特徴

日英博覧会における日本の美術出品は、「古美術品 (old fine arts)」と「新美術品 (modern fine arts)」に二分された点が特徴である。

「古美術品」には、白鳳時代から江戸時代までの仏画・屏風・障子絵・浮世絵などはすべて「絵画 (paintings)」に、仏像と伝統劇の面などは「彫刻 (sculptures)」に分類された。建築は、法隆寺や金閣寺などを実物の五分の一サイズにした模型が「建築モデル (models of old buildings)」とし

て展示され、最後に工芸については「クラフト (craft)」という言葉は使わずに材料により細分し、「金工 (metal works)」「漆 (lacquer wares)」「染色 (fabrics)」と区分している。

「新美術品」の方は、「本邦ノ精華ニシテ英国人ノ最歡迎シ大ニ注目スル所ナルハ疑ヲ容レサルコトナリ故ニ其ノ出品ノ良否ハ直ニ同博覧会ノ成功ニ関係ヲ及ホス」ものとされ、「日本画 (Japanese paintings)」「西洋画 (Western paintings)」「彫刻 (sculptures)」「図案 (designs)」「木版画 (woodcuts)」の次に、「陶磁、七宝、金工、染色及び刺繍、漆、象嵌 (pottery, cloisonne, metal works, dyed fabrics and embroidery, lacquer ware, inlaid and wood-works)」の順で配置されている。

陶磁は「新美術品」のみ出品され、「古美術品」においては陶磁の出品が一切なかったことが分かる。歴史的陶磁の出品がないということは、それまでの万国博覧会における陶磁展示の仕方とは全く異なっているということになる。

2. 「新美術品」における陶磁出品

「新美術品」の陶磁出品においては、京都出身の作家の比重が非常に高かったことが注目される¹。「京焼」を京都で作られた陶磁と定義すれば、出品者 13 人の内 8 人が京都の作家であり、図録掲載 24 点の作品中、11 点が「京焼」である。三浦竹泉 (初代, 1853-1915)、奥村松山、伊東陶山 (1846-1920)、清風与平 (三代, 1851-1914)、清水六兵衛 (四代, 1848-1920)、宮永剛太郎、錦光山宗兵衛 (七代, 1868-1927)、河村靖山 (1890-

1967) などである。

出品作は全般的に過度な装飾を避けており、余白を生かしたシンプルでモダンな節制の美を表しているものが多い傾向が見える。絵付けや彫刻より釉薬技法の駆使が主になっていることがわかる。釉薬の効果を用いたグラデーションの表現や、単色のレリーフの上に釉薬効果を生かしたもの、アール・ヌーヴォー風の図案を用いたものが目立つ。

陶磁器は第七科に入り、第七科の監査は、平野耕輔、執行弘道、塩田真、河原徳立、そして主任・中澤岩太が担当した。特に河原徳立は、ウィーン万博事務局御用掛を務め、1873年東京に輸出向け磁器の絵付け工場「瓢池園」を設立した人物である。1907年には「京都瓢池園」を開いている。主任の中澤岩太は、当時京都高等工芸学校の校長を務め、学校教育だけでなく工芸の図案改革のために様々な活動をした。日英博覧会の出品選定に京焼が数多く選ばれたことには、京都と縁の深い中澤と河原が監査を務めたことが関係している可能性が高い。

3. 京都における図案改革

1895年第四回内国勸業博覧会や1901年第一回全国窯業品共進会では、京焼に対する評価は低かった。ここから1901年から1909年までの間に、京都での陶磁制作に何かしらの変化が起こり、京焼の進歩が目立つようになったと推察できるが、この時期というのは京都高等工芸学校が1902年に開校して、中澤岩太と浅井忠らが京都工芸の図案改革に取り組んでいた時期と完全に重なる。1903年、図案研究団体「遊陶園」の設立、1907年「京都瓢池園」の設立のほか、京都高等工芸学校や京都市陶磁器試験場が教材として収集した陶磁器からも彼らの活動の様子が窺える。

特に浅井忠の図案の影響が見出せる作品としては、伊東陶山の粟穂図案の花瓶や川村靖山の梅模様の花瓶が挙げられる。これらのアール・ヌーヴォーや琳派を感じさせる作品たちは、陶山作品

の口から下へと垂れるように粟の穂と実が描かれる様子や、縦の長い器形に合わせ美しい曲線を生かした表現、靖山のモダンな花のデフォルメ、強烈な色の対比から、浅井の死後山田芸艸堂で出版された『黙語図案集』に載った図案と非常に類似していることがわかる。また、宮永剛太郎の鹿図案の花瓶は、「秋野」という題をつけられているが、浅井による「春野」という鹿の図案と雰囲気が非常に似ており、季節連作の図案が存在していた可能性を推測できる。

おわりに

1910年の日英博覧会の陶磁出品における全く新しい図案や意匠を釉薬技法で表す表現は、直前まで作られていたジャポニズムに対応する装飾陶磁を否定するようなものであった。

京都を中心に起こった図案改革は1900年パリ万博から触発され、琳派や日本伝統の模様など、アール・ヌーヴォーの自己化を大事にしていた。これらの成果がまとめられた日英博覧会における美術品としての陶磁出品は、ジャポニズムの衰退後、万博の最盛期も終わりつつある時代に、日本の陶磁界がいかに世界に向けて発信していたかがわかる事例として読み取れるだろう。

註

- 1 図録に載った24点(図版番号135番から158番)を対象とする。The Office of the Imperial Japanese Government Commission to the Japan-British Exhibition, *An Illustrated Catalogue of Japanese Modern Fine Arts displayed at the Japan-British Exhibition London 1910*, Shimbi Shoin, 1910.『日英博覧会事務報告書』にもその目録が確認できる。